

インテグラル思想研究会
 Beyond Vision Logic～Unitive 段階
 鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
 2006年12月17日（日曜日）

Alchemistsの内的世界が物語るように、「意味構築構造」(“Meaning Making Structure”)の成長は、自己の内省力 (reflexivity) の深化を押しすすめ、最終的には、成長という現象そのものにたいする内省を可能とすることになる。そこにおいて、人間は、成長というもの——そして、その体験主体である自己というもの——にたいする根源的な問いを発することになるのである。主体としての自己の本質にたいするこうした透徹した視線はConstructive-Aware段階においてはじめて確立される能力であるが、個の完成を特徴づけるそうした能力が個であることの意味を根源的に懐疑するものであるという事実は、現象世界 (manifest world) というものが、進化のダイナミズムにより特徴づけられることをとおして、構造的に内蔵する矛盾を端的に象徴するものであるといえるだろう。

Alchemistsの特徴とは、現象世界が構造的に内包する矛盾を認識したうえで、それがもたらす複雑性を意識的に活用しながら、変容のための責任を果たすことができることである。現象世界が変化の只中にあることを認識するAlchemistsは、あらゆる存在の流動性を注視しながら、その創造的な展開に携わろうとするのである。現象世界のなかで展開するものごとを俯瞰するこうした姿勢はAlchemistsに卓越した柔軟性に特徴づけられた行動力をもたらすことになる。それは、人間性の本質にたいする透徹した洞察が可能とする軽やかさと形容することができるだろう。

しかし、あらゆる意識構造がそうであるように、Constructive-Aware段階も、また、独自の構造的課題を内包している。Constructive-Aware段階において、人間は、はじめて、世界の本質を洞察する視野を確立する。しかし、ここで留意すべきことは、こうした姿勢が構造的に世界の本質を洞察する認識者としての立場にたいする執着を内蔵するものとならざるをえないということである。つまり、そこにおいて、Alchemistsは、自己の認識存在としての複雑性にとらえられることになるのである。Constructive-Aware段階のこうした構造的な特性は、洞察という行為が内包する疎外の感覚を増幅することをおして、必然的にAlchemistsの孤独感を悪化させていくことになる。Constructive-Aware段階においては、内省力の深化というそれまでの意識進化の過程を特徴づけていた基本法則が、「解放の機能」として、その限界に到達するのである。

Unitive段階 (6)

Susanne Cook-Greuter (2002) は、Constructive-Aware 段階の高次の段階を Unitive 段階と形容する。この段階において、意識発達の過程はいわゆる「トランスパ

一ソナル」と形容される段階に到達することになる。この段階において、認識のありかたは根本的な変容を遂げることになる。そこでは、それまでの段階における認識を規定していた、本質的に言葉 (symbol) を媒体とした「意味構築活動」 (“Meaning Making Activity”) が超越されることになるのである。

David Loy (1996) の指摘するように、「個」とは、意味を構築することをとおして自己の「実在感覚」 (“sense of substantiality”) を確保しようとする存在である。そこには、常に、窮極的には自己が虚構にすぎないものであることにたいする認識が息づいている。結果として、そうした認識は、自己の本質である虚構性を拒絶して、その溶解を回避しようとする自己増幅活動 (“Atman Project”) へと人間を巻き込んでいく。

Constructive-Aware 段階における、自己増幅衝動に特徴づけられる自己の構造的な性質にたいする認識は、意味構築活動の背後に存在する虚無との対峙を可能とする。そこにおいて、Alchemists は、意味構築活動が構造的に内包する限界を認識 (対象化) することをおして、その束縛から自己を解放しようとするのである。しかし、Alchemists のこうしたころみは、窮極的には、Constructive-Aware 段階の限界を克服することはできない。認識という行為は、本質的に、主体 (subject) と客体 (object) を創造する行為とならざるをえず、そのために、それは不可避免的に自己増幅の行為とならざるをえないのである。つまり、そこでは、まだ、認識という活動をおして自己の背後に存在する虚無への埋没を回避しようとする自己増幅の衝動が意識を規定しつつづけているのである。

自己増幅活動は自己溶解の恐怖を醸成することになる。また、自己溶解の恐怖は、自己増幅活動を促進させることになる。Atman Project とは、人間が個であることをとおして内包する構造的な特性であるということが出来るが、それを解決するためには、実際には、洞察だけではなく、自己として死ぬことが必要となるのである。Unitive 段階とは、こうした関門を潜りぬけたとことろにひろがるあたらしい地平であるといえるだろう。

永遠性・普遍性にたいするまなざし

Unitive 段階において、Ironists は人間 (自己と他者) を「創造的基盤」 (“Spirit”・“Creative Ground”) の顕現として認識する。個人は、人類という生物種が背負う進化という宿命の実現に参画する存在として認識されるのである。

個人の存在は、こうした大局的な視野から、集合的存在との関係性のなかでとらえなおされる。また、こうした関係性にたいするまなざしは、同時に、人間が個であることをとおして構造的に背負うことになる絶対的な孤独を抱擁することを可能にする。そこにおいては、関係性と自律性という人間存在を特徴づける対極的特性が、それを溶解することなく、統合されるのである。つまり、

それらは、異なる視点をとおして照明される、人間存在のあらわれかたとして認識されるのである。

また、Unitive 段階においては、個人の存在は永遠性・普遍性の視点からとらえなおされることになる。Ironists は、誕生・成熟・老衰という、全ての人間がたどる人生の旅路を世界の本質である変化の法則の自然な発露として受容するのである。

Unitive 段階においては、諸々の意識状態にたいする主体的な関係性が獲得される。Ironists は、人間意識というものが様々な意識状態のなかで立ち上がるものであることを認識することをとおして、それぞれの意識状態が提供する認識の枠組を受容するのである。意識状態にたいする感性の確立は、結果として、Constructive-Aware 段階の重要懸案である言語を基盤とした意味構築活動の構造的限界の克服にたいする執着から個人を解放する。Ironists にとり、それは、克服すべき問題ではなく、むしろ、刻々と展開する意識状態の変化の過程のなかで顕在化するひとつの人間の特性に過ぎないのである。

Unitive 段階において達成される意味構築活動の超越は、Ironists に意味構築活動の本質である価値判断からの解放をもたらす。そして、それは、あらゆるものを創造的基盤の同等な顕現として認識する包括的 (“Unitive”) な視野をもたらすのである。ここにおいて、Ironists は、日常の矮小な具体的現象のなかに、永遠性と全体性を見いだすことができるようになる。つまり、Ironists は、砂ひとつぶのなかに、世界を見いだすことができるのである (“Ironists can see a world in a grain of sand...”)。

また、こうした永遠性・普遍性にたいする感覚を基盤とする包括的な認識構造は、他者を（そのひとの本質を尊重したうえで）ありのままに抱擁することを Ironists に可能とする。全ての人間は、どの発達段階にあらうとも、刻々と展開する進化の過程に参加するかけがえのない存在である。永遠性・普遍性にたいする感覚を基盤とするこうした認識構造は、また、同時に、個人というものが——たとえその業績がいかに偉大なものであらうとも——進化という大河のなかでは、一滴の水滴ほどの存在価値しかもたないものであることを認識する謙虚さを内蔵している。

こうした謙虚さのもとに、人間（自己と他者）をありのままに受容する Unitive 段階の意識構造は、Ironists に根源的な安心の感覚をもたらすことになる。そして、それは、Ironists に合理的に構築された価値体系の束縛を回避して、根源的な自由 (radical freedom) を抛りどころとする世界との携わりを実践することを可能にするのである。諸々の外的な条件（例：成長度・年齢・性等）の背後に存在する「本質」 (“Essence”) にたいするまなざしは、Ironists のなかに、あらゆる存在が内包する根源的な尊厳にたいする尊重の姿勢を醸成する。周囲の人

間は、Ironists とのやりとりのなかで、自らが無条件に尊重されていること、そして、自らが深く満たされていることを実感するだろう。

葛藤の受容

Unitive 段階における意味構築活動の根源的な超越は、必然的に、それまでの発達段階を特徴づけていた問題・課題の解決という自己の構造的な衝動からの解放を可能とすることになる。Ironists にとり、葛藤 (conflicts) とは、もはや、解決されるものではなく、人間として存在することが構造的に内包する条件なのである。Ironists にとり重要なことは、ある目的 (段階・状態) を設定して、その実現を追及することではなく、むしろ、永遠性・普遍性にたいするまなざしを基盤とする大局的な視野から、進化が要求する行動を創造的に展開することなのである。世界を俯瞰する目撃者・観想者としての姿勢は、Ironists に世界の進化にたいする責任を抱擁させる。存在の本質的な価値 ("Ground Value") の認識をもとに、Ironists は、あらゆる価値判断から解放されたところにひろがる根源的な自由に他者を導こうとするのである。

慈愛

上述のように、Constructive-Aware段階の問題意識は、言語を基盤とした意味構築活動の構造的限界を克服するということである。意味構築活動が個としてあることが内包する根源的な衝動 (「死の拒絶」) を基盤とするものであるという意味において、それは人間性そのものと対峙する姿勢に貫かれたものであるということができよう。しかし、Unitive段階においては、こうした人間性にたいする透徹した洞察は、それを解決すべき問題として認識する対峙の姿勢ではなく、むしろ、それを人間としてあることが構造的に内包する欲求として、すなわち、全ての人間を結びつける「絆」として認識されることになる。そこにあるのは、窮極的には、生きとし生けるものが生きるということをとおして背負うことになる根源的な宿命にたいする共感と慈愛であるといえるだろう。世界に存在するありとあらゆるものとの同胞感覚 ("affiliation") は、生きるということが体現するこうした根源的な衝動の受容をとおして確立されるのである。

生命への奉仕

Ironists としての意識構造を確立するとは、この惑星において脈々とつづく生命の歴史にたいする責任を抱擁することである。そして、この惑星における生命の歴史にたいする責任を抱擁するとは、過去・現在・将来というものを包含する悠久を抱擁することである。そこにおいて、Ironists は、この瞬間、自らが存在していることを、惑星における生命の進化に参画するための責任を全うするための機会としてとらえなおして、生きていくことになるのである。

われわれが個人としてこの世界に存在する期間は微々たるものである。われわれは、刹那のあいだ、この世界に個人として存在したあと、再び存在の基盤である創造的基盤へと回帰していく。その意味では、個人としてあるとは、自己を創造的基盤からあえて疎外することをとおしてあたえられる「存在の状態」といえるのである。そこにおいて、われわれは、生命の歴史にたいする奉仕の責任を抱擁して、世界が刻々と開示する真理にもとづき、自己の可能性を実現していくことになるのである。

Unitive 段階において、真理とは、世界そのものが内包するものとして認識される。それは、合理的な方法をとおして獲得・蓄積されるものではなく、むしろ、自己を「空」(open)にして、世界に参加するなかで開示されるものなのである。

個としてあることが構造的に内包している「疎外性」(separateness)と「刹那性」(transiency)を認識したうえで、それを永遠性と普遍性の視点から積極的に生きることを選択する Ironists の「行動論理」(“Action Logic”)は、真の意味でトランスパーソナルと形容することのできる最初の段階である。そして、21世紀において、人類の集合的な意識進化の過程は、はじめて、こうした構造を集合的な規模で構築しようとしているのである。

參考資料

- Ernest Becker (1973). *The denial of death*. New York: Free Press.
- Ernest Becker (1975). *Escape from evil*. New York: Free Press.
- Susanne Cook-Greuter (2005). Ego development: 9 levels of increasing embrace. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
- Susanne Cook-Greuter (2005). On the development of action logics. Available at <http://www.cook-greuter.com/>
- James Fowler (1981). *Stages of faith: The psychology of human development and the quest for meaning*. San Francisco: HarperSanFrancisco.
- James Fowler (1996). *Faithful challenge: The personal and public challenges of postmodern life*. Nashville, TN: Abingdon Press.
- David Loy (1996). *Lack and transcendence: The problem of death and life in psychotherapy, existentialism, and Buddhism*. Amherst, NY: Humanity Books.
- Bill Torbert and associates (2004). *Action inquiry: The secret of timely transforming leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler Publishers.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2006). *Integral spirituality: A startling new role for religion in the modern and postmodern world*. Boston: Shambhala.